

麻生区黒川地区の昆虫

1 夏期のチョウについて

谷 晋^{*}

1. はじめに

川崎市の自然植生である常緑広葉樹林は、古代からの人間の影響により、現在ではごく一部の場所を除いては残されていない。それにかわってクヌギ・コナラ群集からなるいわゆる雑木林が代償植生として人間の手により積極的に維持されてきた。この雑木林は、かつては炭林として、現在ではシイタケ栽培の原木林などとして多様な利用が計られてきた。また都市に生活する人にとっては、身近なレクリエーションの場として親しまれている。昆虫をはじめ多くの動物にとっても、この雑木林は好適な棲息環境を提供している。

ところが、かつては川崎市の北部丘陵地に広範囲にわたって存在していた雑木林も、近年の開発の影響を受けてその面積を急速に減じている。当然のことながら、そこを棲み家としていた昆虫の多くも同時に姿を消していったと思われる。チョウでは平地性ゼフィルス(ミドリシジミ類)やタテハチョウの仲間は森林性の種が多いためにこの影響を最も強く受けやすい仲間である。とくに、オオムラサキは、この雑木林を代表するチョウであり、川崎市の雑木林にもかつてはかなり広く分布していたと思われるが、現在では、樹林面積の減少とともにほとんど姿を消してしまった。

その中において、麻生区黒川地区は、クヌギ・コナラ群集が比較的広範囲にわたって保全されている。オオムラサキを始め、川崎市としては、驚くほど多くの昆虫類が棲息することで知られている(神奈川昆虫調査報告書、1981)。しかしながら、黒川地区でも宅地開発はかなりの速度で進行しており、近い将来、この貴重な雑木林も失われてしまう可能性が高い。これらの点において、現在の昆虫相を把握し、また今後の変化を継続的に調査していくことは極めて重要である。

今回、川崎市青少年科学館の夏休み理科教室「少年生態学教室」が黒川地区で行われ、微力ながらも協力させて頂いた。その際に、子供達とともに観察した昆虫類のうち、チョウについてまとめておきたいと思う。棲息していると思われるすべてのチョウ類を対象とする調査としては、不十分なものであるが、1985年の夏の棲息状況として今後の参考のために報告しておきたい。

2. 調査方法

調査地域は図1に示したように、麻生区黒川地区の雑木林とその周辺地域である。図中に示したようなセンサスルートを設定し、午前10時から午後3時の間にそのルートに沿って歩き、出現したチョウを記録した。調査地は水田が丘陵地の谷間に深く入りこんで谷戸を形成している。人家は水田と丘陵地の間に点在している。丘陵地はクヌギ・コナラからなる雑木林が主体で、所により果樹園や畑地、ヒノキヤスギの植林が見られる。

この調査は1985年7月17, 28日と8月8日の4日間にわたり実施した。また7月24日には、モンシロチョウとスジグロシロチョウについて、ルートの左右5m以内に出現した個体数を記録した。その他に7月24日から25日にかけて、地表性の甲虫類を採集するために3ヶ所に各3個ずつベイトラップと精蜜トラップを設置した。しかし、オサムシ、ゴミムシなどの目的とした甲虫類はほとんど採集出来なかったため、今回とくに報告はしない。

※財団法人 科学教育研究会

3. 調査結果

今回、確認されたチョウの種は、比較のために生田緑地（沢木，1980）と黒川地区（神奈川県昆虫調査報告書，1981）の記録とともに科別に示した。Aは生田緑地、Bは黒川（文献）、Cは今回の記録である。●印が棲息していることを示している。

図1 チョウのセンサスルート

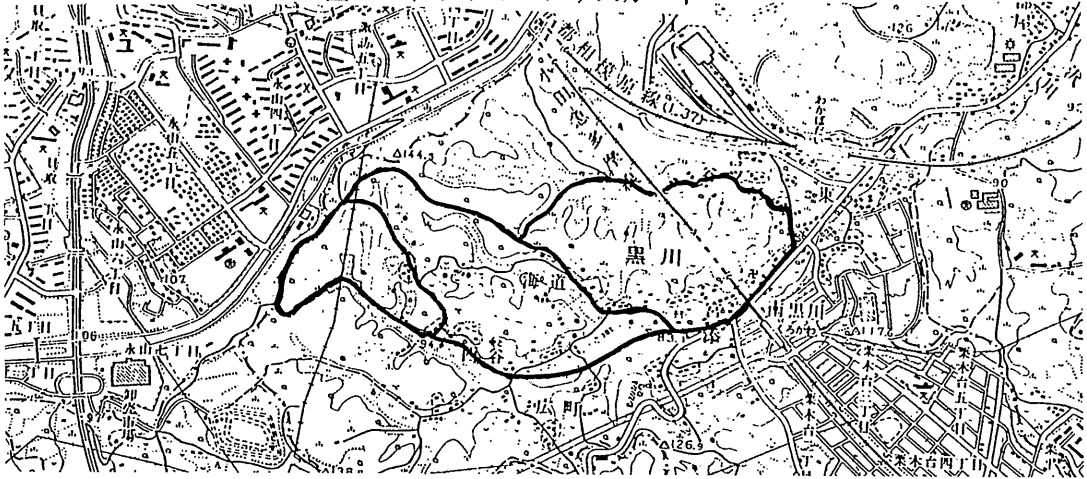


表1 棲息が確認されたチョウの種類	A	B	C
セセリチョウ科 Hesperiidae			
ミヤマセセリ <u>Erynnis montanus</u>			●
ダイミョウセセリ <u>Daimio tethys</u>	●	●	●
キマダラセセリ <u>Potanthus flavum</u>	●	●	
コチャバナセセリ <u>Thoressa varia</u>	●		●
ホソバセセリ <u>Isoteinon lamprospilus</u>			●
オオチャバナセセリ <u>Polytremis pellucida</u>	●	●	●
チャバナセセリ <u>Pelopidas mathias</u>		●	
イチモンジセセリ <u>Paranara guttata</u>	●	●	●
アゲハチョウ科 Papilionidae			
ジャコウアゲハ <u>Atrophaneura alcinous</u>		●	●
アオスジアゲハ <u>Graphium sarpedon</u>	●	●	●
キアゲハ <u>Papilio machaon</u>	●	●	●
ナミアゲハ <u>P. xuthus</u>	●	●	●
オナガアゲハ <u>P. macilentus</u>	●		
モンキアゲハ <u>P. helenus</u>	●		●
クロアゲハ <u>P. protenor</u>	●	●	●
カラスアゲハ <u>P. bianor</u>	●	●	●
シロチョウ科 Pieridae			
ツマキチョウ <u>Anthocharis scolymus</u>	●	●	
キチョウ <u>Eurema hecabe</u>	●	●	●
ツマグロキチョウ <u>E. laeta</u>	●		
モンキチョウ <u>Colias erata</u>	●	●	●
モンシロチョウ <u>Pieris rapae</u>	●	●	●
スジグロシロチョウ <u>P. melete</u>	●	●	●

棲息が確認されたチョウの種類	A	B	C
シジミチョウ科 Lycaenidae			
ウラゴマダラシジミ <u>Atropoetes pryeri</u>	●	●	
アカシジミ <u>Japonica lutea</u>	●	●	
ウラナミアカシジミ <u>J. saepestriata</u>			●
ミスイロオナガシジミ <u>Antigus attilia</u>	●	●	
オオミドリシジミ <u>Favonius orientalis</u>	●	●	
ミドリシジミ <u>Neozephyrus taxila</u>	●	●	
トラフシジミ <u>Papala arata</u>	●		●
ベニシジミ <u>Lycaena phaeas</u>	●	●	●
ゴイシジミ <u>Taraka hamada</u>	●	●	●
ウラナミシジミ <u>Lampides boeticus</u>	●	●	●
ヤマトシジミ <u>Pseudozizeeria maha</u>	●	●	●
ルリシジミ <u>Celastrina argolus</u>	●	●	●
ツバメシジミ <u>Everes argiades</u>	●	●	●
ウラギンシジミ <u>Curetis acuta</u>	●	●	●
タテハチョウ科 Nymphalidae			
メスグロヒョウモン <u>Damora sagana</u>			●
イチモンジチョウ <u>Limenitis camilla</u>	●	●	●
コミスジ <u>Neptis sappho</u>	●	●	●
ミスジチョウ <u>N. phillyra</u>	●	●	
アカタテハ <u>Vanessa indica</u>	●	●	
ルリタテハ <u>Kaniska canace</u>	●	●	
ヒオドシチョウ <u>Nymphalis xanthomelas</u>	●	●	
キタテハ <u>Polygonia c-aureum</u>	●	●	●
スミナガシ <u>Dichorragia nesimachus</u>	●		
ゴマダラチョウ <u>Hestina japonica</u>	●		
オオムラサキ <u>Sasakia charonda</u>		●	●
ジャノメチョウ科 Satyridae			
ヒメウラナミジャノメ <u>Ypthima argus</u>	●	●	●
ジャノメチョウ <u>Minois dryas</u>	●		●
ヒメジャノメ <u>Mycalesis gotama</u>	●	●	●
コジャノメ <u>M. francisca</u>	●		●
クロヒカゲ <u>Lethe diana</u>	●	●	●
ヒカゲチョウ <u>L. sicelis</u>	●	●	●
サトキマダラヒカゲ <u>Neope goschkevitschii</u>	●	●	●

表 2 に 7 月 24 日に行ったモンシロチョウとスジグロシロチョウの環境別の出現個体数を示した。両種の棲みわけについては高橋 (1958) などがかなり古くからの報告がある。今回は、子供達とこのことを確かめるために、チョウのセンススルートを便宜的に 5 地区 (図 2) に分け、各々の出現個体数を調べた。1, 2 および 3 は水田等の耕作地が主体で明るい草地的環境であり、4 と 5 は林内を巡る薄暗い環境となっている。

結果は明らかに耕作地等の草地的環境ではモンシロチョウの割合が高いが、林内では姿を見せなくなり、逆にスジグロシロチョウの個体数が多くなることが認められ、両種の棲みかけ現象が確かめられた。(表 2)

4. まとめ

今回の調査の結果確認できた種は 6 科 35 種である。春や初夏にのみ出現する種および今回の調査で

見落とした種もあると思われる。そこで、神奈川県昆虫調査報告書に記録された黒川のチョウ 44 種と照合してみると、黒川地区には現在 50 種ほどのチョウが棲息していることになる。さらに、生田緑地に棲息し、黒川地区で未確認と思われるオナガアゲハ、ウマグロキチョウ、スミナガシおよびゴマダラチョウの 4 種についても棲息の可能性はかなり高い。おそらく最終的には 60 種近いチョウの棲息が予想される。同様な雑木林が保存されている生田緑地のチョウが 47 種であることと比較しても（沢木、1980）、黒川の昆虫相がかなり豊かであることが考えられる。このことは、多摩ニュータウンなどの住宅地に隣接しているにもかかわらず、黒川地区の雑木林はかなり良好な状態に保たれていることを示している。とくに今回も棲息が確認されたオオムラサキの棲息にはかなり広大な雑木林が必要であり、川崎市ではこの地区にしか生残っていないとされている。このことだけをとっていても、黒川の自然は川崎市のみならず、神奈川県東部地域でも貴重な存在である。かつての川崎市の自然を後世に伝える野外博物館の存在として、黒川地区の雑木林の維持が今真剣に考えられても良いのではなかろうか。今後とも出来る限り黒川地区の昆虫相についての調査を継続し、その変化を記録していきたいと思っている。今回は文献調査を行う時間的余裕がほとんどなかったため、かなり不完全な報告となっている。今後、多くの御批判御助言をお願いしたい。

表2 モンシロチョウとスジグロシロチョウの棲みわけ

地区	環 境	個 体 数		モンシロの割合 (%)
		モンシロ	スジグロ	
1	水田・草地	4	1	80
2	水田・草地	3	1	75
3	水田・林縁草地	14	5	74
4	林 内	0	7	0
5	林 内	0	8	0

